
ちびっこ達は止まらない

夢優うさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちびっこ達は止まらない

【Nコード】

N0295Y

【作者名】

夢優つさぎ

【あらすじ】

とあるド田舎にひっそりとたたずむ、一軒の日本家屋。自他共に認める幽霊屋敷が僕の家。そのはずなのに——どうしてこんなことになっているんだろう。理解できない。あ、なんか幻聴が聞こえる。どうしよう、疲れてるのかな。僕幽霊なのに。前作「幽霊で遊ぼう」の続編です。先にそっちをどうぞ。

（前書き）

「幽霊で遊ぼう」の続編です。

気づけば前作の投稿から半年以上の月日が！！
……なんか色々すいませんでした。

以下の項目に同意の上、お読みください。

- ・現実逃避は自重しない

まあ、これだけですけど。

2011・11・7 加筆しました

最初に、誤解を与えないように一つ言っておこうと思う。

幽霊というものは夜に出るといふ認識が、人々の意識にがちり根を張って離そうとしないみたいだけど、幽霊が昼に居ないってことではないんだ。

夜のほうを好むようになるっただけ。もう死んでいる身としては、騒がしい昼間よりみんなが寝静まっている夜中とかのほうが居心地いいんだよ。

死んでるから寝る必要もないし。ずっと起きていられるし。まあ、そのせいで幽霊は基本終始暇なわけなんだけどね。ああでも、怨念とか持つてる人は恨みをぶつけることに忙しいんだろうか、もしかして。……難儀なことだ。

さて、前置きはこのぐらいにして、ここで改めて自己紹介でもしておこうか。

家から一步出れば見渡す限り田園風景と言っても過言ではないド田舎にある、とある日本家屋が僕の家だ。

この家はその半分ほどが森に埋まっていて、手入れもされていないので、そのおどろおどろしい雰囲気と相まって、夜になると幽霊屋敷に様変わりする。ていうか、実際に幽霊の出る地元じゃ有名な立派な心霊スポットだ。

まあ、その幽霊って僕の事なんだけどね。ははっ。

そのはずなのに、なんでこんなことになっているんだろう。理解できない。

「おーいゆうれー、あそびにきたぞー。ありがたくおもえっ」

「かいとー、あーそぼっ」

……いかん、なんか幻聴が聞こえてきた。耳が悪くなっちゃったのかな。

幽霊でも受診できる病院って、どこかにありませんかね？

時刻は珍しく昼の時間帯。時計がないから詳しい時刻は分からないけど、真っ昼間という単語だけで説明は十分だろうと思う。

今日僕は珍しく昼に活動していた。理由は何という事もなく、単に日向ぼっこがしたくなっただけである。……幽霊のくせにとか言うなそこ。こちらら善良な死後ライフを満喫してるんだよ。

そうして庭に出た僕は、多分自然の恵み（雨）のおかげだろうまだ枯れていない木に寄りかかってぼけーっと庭を眺めていたわけです。……あれ、これ日向ぼっこじゃなくて日陰ぼっこじゃあ……まあいいか。

柔らかい風が吹いて行ったり、森の近くだからか鳥の鳴き声がよく聞こえたりして、すごく癒されていたんだよ。

そうして平和な時を満喫していたのに、いましがたあの声が——いや……待って、今のなし。あれ幻聴だから。僕は現在進行形で日向ぼっこもとい日陰ぼっこを満喫中です。

「ねーしゅくん、かいと、こないよ？」

満喫中です。

「うん……なんでだろうな」

満喫中です。あ、雀がこつち飛んできた。そういえば、雀をこんなに近くで見たことないなあ。なんか和む。可愛い。

でもこんなに近寄っちゃって大丈夫なのか？ ……ああ、僕が幽霊だから気付かないのか。役得役得。

「ねてるのかな」

「そっか、じゃあおこそうぜ。——ゆうれー！ おきろー！」

幽霊は眠りません。……はっ！ 危ない、幻聴に反応してしまった。疲れてんのかな、僕。幽霊なのに。

でもあんなに大声張り上げなくてもいいのに。

大丈夫。ご近所迷惑にはならないさ。この家の近くにご近所さんいないから。……あれ、自分で言ってるなんか悲しくなった。

——待って。幻聴、幻聴なんだった僕！ 引きずられないで！
負けるな僕！

「……こないねー」

「ゆーれい、ぐーたらなんだな」

おいまでコラ。今のはちょっと聞き捨てならんぞちびっこども。

……はっ！ 思わずつられてしまった！ やめて。ほんとやめて！
僕の平穏を乱さないでよ頼むから！

……いいや。そのうち聞こえなくなるよ、きっと。ポカポカ陽気

に誘われて一眠りすれば、時間もたつて頭もすつきりして幻聴も聞こえなくなるさ。

まあ、一つ欠点をあげるとすれば、僕が幽霊だからか眠気が全然起こらない点なんだけど。——ちくしょう、計画丸つぶれじゃないか。

「あ、ねえねえしゅうくん。もう、かいとおこしにいこーよ」

不法侵入 反対！！

部外者は速やかにお引き取りください。不法侵入は犯罪です。警察呼びますよ。幽霊だけど！

……いや、落ち着け僕。疲れてるんだよ。これは幻聴の方針で行こうと心に誓ったじゃないか。いや、方針とかじゃなくて、えつと……とにかくこれは聞き間違い！ 目の錯覚ならぬ耳の錯覚！

さあ頭の病院にレッツゴー！（混乱中）

「え、いーよ。ゆうれーがねてるなら、そつとしておいてやろーぜ」

きた！ やった！ ありがとう！ ごめんね名前覚える気が無いちびつことか思つてて。これからはちゃんと名前で読んであげるからね。

よし、これでやつと平穩に過ごせるフラグが——

「それより、ねてるすきに、ここ、たんけんしようぜ！」

——折れたああ！ 立つ前に折れた！ それどころかさらに厄介なことに！！

もつと遠慮をわきまえて！ 出てこい親！ それか良識のある大人の人！ 助けて僕じゃ手に負えない！！

……はっ、取り乱した。

いや、でも、ほら。これ幻聴のはずだし。もしかしたら夢かもしれないし。きつと大丈夫じゃないかなーなんて。ははは。（滝汗）

「！ おもしろそうだね！ いこういこう！」

.....

.....

いいよもう。認めればいいんだろ。現実だって認めればいいんだろ。そうだよ現実だよ。紛う事なき現実だよ。取り返しがつかないの。砂糖菓子みたいに甘くないの。真実は一つしかないの。そして僕に優しくないのが現実の姿だよ。知ってるよ！

知ってるからこそ、さっさとトンスラしようと思えるんじゃないか。

よし、ちよつとちびつことくれんぼでもしようかな。もちろん僕が隠れるほうで。

開き直ったせいか、どことなくスッキリした気持ちで決意が固まるね。そうと決まればまず移動しよう。とりあえず、このまま家の裏に――

「あ！ かいとだー！」

「なんだようれい。いるんなら、ちゃんといえよな」

.....。

たっぷりと沈黙を置いてから、僕は顔をあげてみた。

庭と玄関とを結ぶ道に、ふたりの子どもが立っていた。名前は確か、僕のことを幽霊としか呼ばないほうが秀で、もう一方が光ひかるだった気がする。

この前きていた、こいつらよりは大きい子どもと、僕の名前だけやたら饒舌に喋れる子どもはいない。

つまり、今回は多少なりとも機能していたブレーキ役がない。
いるのはただ突っ走る子どもたちだけだ。

「かいと、あそぼー！」

光のほうにひつつかれた。今更ながら、どうしてこんなに懷か
れるのか分らない。というか、今僕はどんな行動をとるべきなん
だろう。展開が急で頭がついて行かない。

ぼんやりと現実味のない頭の中で、てれれーと、エンカウント
が流れるのが聞こえた。

ちびっこ×2

「かいとのこうどう」
にげる

あいそをふりまく
とつくにしんでしまった めをむける
げんじつとうひ はつどう

僕の頭はとうとうやられてしまったのだろうか？ そう思いなが
らも、僕の願望が反映されまくっている選択肢に従ってみることに
した。

逃げたいけど、ひつつかれているから無理だろう。
取りあえず、愛想笑いしてみた。

「！ いいの！？ やった！」

ものすごく逆効果だった。思わず昨日を見つめて生きて行きたくなかった。

そう言えば昨日は月が綺麗だったなー……

「むー……たんけん、したかったのにな」

秀のほうに不満げに呟いたので（とつくに死んでしまった）目を向けると、きらきらした目で僕を見ていた。

僕の家は危険がいっぱいだけど、いいの？ 仮にも幽霊屋敷だから、穴とか開いてたりするんだけど。

「しかたないな。ゆーれー、あそぼうぜー」

心が折れそうになった。

選択肢はまだ一つ残っているけど、現実逃避はもうさんざんやって疲れた。全く役に立たないエンカウトだった。

恐ろしいな、ちびっこ達。こんなにお前らと遊ぶのが嫌だと思うなんて。やっぱり前回いきなり押しかけてくれたのが原因だな。もう深層心理からじわじわと攻め込んでくるほどえげつないトラウマになってしまったのか。また今日も僕はちびっこに屈してしまうのか。

……いや大丈夫だ。僕は負けない。こんなちびっこに負けてなるものか。そう、言われてみればこいつらはちびっこなのだ。こんなちんまいのに負けるなんて情けないじゃないか。例え前回敗北宣言していたとしても、すでに負けてるんじゃない？ っていう状況だったとしても、負けていないのだ。そう信じてる。信じる者は救われるっていうし。

というわけで、戦うんだ僕。頑張れ僕。負けるな僕——！

『よし、じゃあお前ら中に入れ』

僕は笑みを浮かべて宣戦布告をした。

結論。

——今日も、負けました。

もう病院じゃなくていいので、僕の気持ちを分かってくれる人なら誰でもいいので、誰か幽霊見える人紹介してください。

もう死んでるのに、何故か胃のあたりがキリキリと痛むんですよ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0295y/>

ちびっこ達は止まらない

2011年11月12日20時49分発行